

1 研究主題

自ら学びと子どもの育成〔三年次〕
～教師のプロジェクト型の学びを通して～

2 主題設定の理由

(1) 学習指導要領や教育の今日的課題から

AI技術の飛躍的な進歩やグローバル化、生産年齢人口の減少といった社会的変化が加速する昨今、学校教育には子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

一方、教師の姿についても、社会の変化に伴い、変革することが迫られている。「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」（中教審答申 R4.12）では、これからの教師の姿について「個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、主体的・対話的で深い学びを実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる。」「教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、研修実施者及び教師自らがデザインしていくことが必要になる。」と言及されており、学び続ける教師であることの重要性が特に強調されている。「令和の日本型学校教育」を担う教師自身が、変化を前向きに受け止め、自らの学びのニーズに動機づけられ、探究心を持ちつつ自律的に学び続けることが必要となってきた。

(2) 熊本市の教育から

熊本市では、めあて、振り返り、対話の視点から、「子どもが学びとる」授業づくりを通して、自ら考え主体的に行動できる子どもを育てることを目指している。そのために、教師自身も子どもと同じように、主体的に学びをマネジメントしながら、授業改善を進めていくことが必要であるとしている。

(3) 本校の教育目標から

本校の学校教育目標は「夢をもち よく考え 心豊かに たくましく」であり、教育スローガンとして「子どもが主役!子どもがつくる学校!～自分で考え、判断し、行動できる力の育成～」を掲げている。具体的には、次のようなことに重点をおいていくこととしている。

- ・主体的に学び、自ら考える力を身につけた子どもを育成する。
- ・「みんなのめあて」を実践する子どもを育成する。

「みんなのめあて」とは、学校教育目標達成のための具体的な子どもの姿のことで、児童は学期ごとに数値で振り返りを行っている。昨年度からは、各項目について各学級で話し合ったり、教職員の思いを取り入れたりすることによって、より子どもの実態に沿っためあてとなっている。この取組により、自分で考えたことを適切に判断し、行動できる力の育成を目指している。

(4) 研究のあゆみと子どもの実態から

令和4年度から「自ら学びとる子どもの育成」という研究主題のもと、各学年部で子どものゴールの姿を思い描き、教師も子どもと同じように、「プロジェクト型」の学びを行うことで授業改善を進めた。その結果、子どもと教師の実態に即した授業づくりを行うことで、子どもたちの考えが広がったり深まったりする姿や、学んだことを生かして自分たちで次の学びへとつなげようとする姿を見ることができた。また、リフレクションを促す授業研究会を通して教師同士の対話による研修を多く行ったり、学びの「概念化」を行ったりしたことにより、教師自身も授業力の高まりを実感できたことが年度末のアンケートからわかった。

しかし、このような研究に2年間取り組んだことにより、校内研修の在り方として、以下3点の課題が見えてきた。

- ・各学年部・各教室で設定したテーマを意識しながら、継続して取り組んでいたのか。
- ・プロジェクトシートや大研(6回)が教師一人一人の授業改善につながったのか。
- ・学年部・教室だけでなく、もっと多くの職員と協働的に学べるようにできないか。

これらの課題は2年間の研究を経て明らかになったものであり、解決することができれば大変意義のある研究を行うことができると考える。

また、子どもの主体的に学習に向かう力についての個人差に課題がある。熊本市学力調査から、学年が上がるにつれて学力の個人差が大きくなっている。その要因として、個人差を子ども自身が自覚し、苦手意識をもってしまい、「誰かに答えを教えてもらえばいい」という姿勢の子どもがいるのではないかと考え、昨年度も研究の課題として取り組んだ。しかし、実際に研究が効果的に働いたと考えられるものは挙げられなかった。

以上のことから本校の子どもに必要とされているのは、昨年度に引き続き、主体的に学習に向かい、一人一人が自分なりの考えを持ち、他者の考えを取り入れながら解決に向かって行動する力である。それはまさに、熊本市が目指す「学びとる」授業によって育成されるものである。

そこで、本年度は研究テーマを「自ら学びとる子どもの育成〔三年次〕～教師のプロジェクト型の学びを通して～」と設定することとした。令和4年度からのテーマを継続し、自ら学びとる子どもの育成を全職員で目指す。めあて、対話、振り返りを大切にした授業づくりをすることで、主体的に学び続けることができる子どもを育てていきたい。

また、すべての子どもが主体的に学習に向かうことができるよう、ユニバーサルデザイン(以下UD)の視点を生かした授業づくりを行うことが必要だと考えた。すべての子どもが楽しく学び合い「わかる、できる」を目指す授業のUDの視点を生かした授業づくりをすることで、すべての子どもの学習内容の理解に役立ち、主体的に学べる環境をつくることではないかと考える。

そのような授業の実現のために、「プロジェクト型」での教師の学びをさらに追究することとした。この「教師のプロジェクト型の学び」は、教師も子どもと同じように、探究心を持ちつつ自律的・主体的に学び続けていくことができ、大変意義あるものである。

3 研究主題について

(1)「自ら学びとる子ども」とは

本研究における「自ら学びとる子ども」とは、熊本市が目指す「学びとる授業」によって育まれる資質・能力を身につけた子どものことを指している。昨年度に引き続き、本年度も第1回の校内研修において、「学びとる授業とはどんな授業なのか」について全職員で考えを出し合い、共有した。その研修を通し、本校では「学びとる授業」を、以下のようなものであると考え、研究を進めることとした。

【課題設定】 ○「知りたい」「なぜだろう?」「やってみよう!」など、自ら解決したい問いをもつこと

○めあてやゴールを自分たちで作り出すこと

○学びや経験をもとに、自分の考えや解決方法をもつこと

【対話】 ○考えの根拠をもつこと

○対話の中で他者の考えとの共通点、相違点を見つけること

○他者の考えを自分の考えに生かして再構築すること

【振り返り】 ○生活と学習内容を関連付けること

○学習を振り返り、自身の学びの過程や変容を自覚すること

○学習を振り返り、さらなる問いにつなげること

○学んだことを実践として広げていくこと

【UD(ユニバーサルデザイン)】 ○どの子どもも主体的に学べること

このような授業を実現するためには、教師は新たな授業をデザインしていくことが必要である。教師主導の授業ではなく、子どもが「なぜだろう?」「やってみたい!」という問いが生まれる工夫をし、課題解決に向けて対話しながら考え、実践するプロセスを大切にしたい。そして振り返りにおいて、子ども自身が自分の学びのよさを自覚する中で、さらなる問いへつながっていくという、学びの連続性が生まれる授業を目指し、改善していく。

(2) 教師のプロジェクト型の学びとは

プロジェクト型の学びとは、「決められた答え」に向かって「決められた方法」で一斉に取り組むのではなく、自身の課題から問いを設定し、それを解決するための計画、実践、評価(振り返り)、改善を繰り返し、試行錯誤しながらよりよい方法をつかみ取る学びのことである。うまくいかないことがあっても、そこから学び、再び問いを設定して解決に向かって粘り強く取り組むことにより、主体的な学びが実現される。

本研究では、このプロジェクト型の学びによって教師 自らが主体的に学びを進めていくことを目指している。目指す子どもの姿や教師自身の姿を具体的に思い描き、教師自身が問いを設定し、実現するための取組をチームで協働的に調べたり考えたりする。それを実践し、適切だったか振り返り、さらなる問いをもって改善を繰り返すことにより、教師一人一人の授業改善を図りたい。



4 研究の仮説

教師が授業に関する課題を設定し、計画、実践、振り返りを繰り返すプロジェクト型の学びの中で、協働的に学び合うことにより、教師一人一人が授業を改善し、自ら学びとる子どもを育成することができるであろう。

5 研究の視点

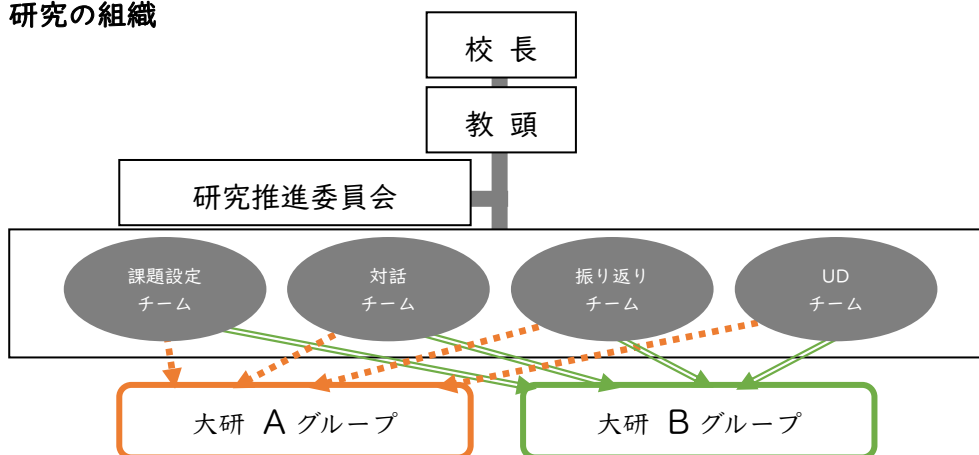
視点① チームによる教師の協働的な学び

- ・各学年・教室の枠を超えた教師の「学びたい」を生かしたチームづくり
- ・授業研でのチームの学びが次へ生かされる参観シート

視点② 教師が自身の変容を実感できる振り返り

- ・チーム内での実践報告や子どもへのアンケートの定期的な実施
- ・個人やチームの取組の全体共有

6 研究の組織



7 研究の内容と方法

(1) チームについて

- ① 課題設定、対話、振り返り、UD から選択し、全職員がいずれかのチームに所属する。
- ② チーム内での中研を実施する。(参観シートの活用)

(2) 大研について

- ① 4つのチームの各半数ずつのメンバーから成る大研 A,B グループを編成し、授業づくりを行う。
- ② 大研授業者は事前研の10日前までに管理職、研究部に指導案を提出する。
- ③ 全職員での授業参観、事後研究会を実施する。

(2) 授業研究会(事後研究会)について

- ① 職員で役割を分担し、会の準備や進行を行う。
(授業追跡記録、写真記録、司会・提案・議事記録、謝辞、会場責任者など)
- ② 大研については、外部講師を依頼する。
- ③ 参加者全員が、研究授業を通して考えたことについての振り返りを行い、アウトプットし、自身の指導に生かすことができるようにする。

(3) その他の研修

- ① 個人でのまとめと振り返りの発表を年度末に実施する。
- ② 人権教育についての研修、実技研修、特別支援教育研修、外部講師による研修などを設定する。

資料1 授業研の持ち方

| | 中研 (チームで検討して実施する) | 大研 |
|------|---|-------------------------------|
| 授業者 | チームの中から1人~2人・半数・全員 | 1人 |
| 実施日時 | 校内研で設定した時間を基本とする。 ただし、期間内であればチーム内で設定も可 (全体周知) | 研究部で設定した日時 |
| 参観者 | チームメンバー：必ず ほかの職員：希望 | 全職員・講師 |
| 参観時間 | 1時間すべて | 1時間すべて |
| 指導案 | 参観シートのみでも可 | ・熊本市の様式 ・参観シート 両方 |
| 事後研 | チームメンバー (2回目の中研については全職員で共有) ※校内研の時間に設定するが、必要な場合はチームで設定して実施 | 校内研の時間内に 全職員参加 ※講師による助言 |

資料2 研究の流れ

